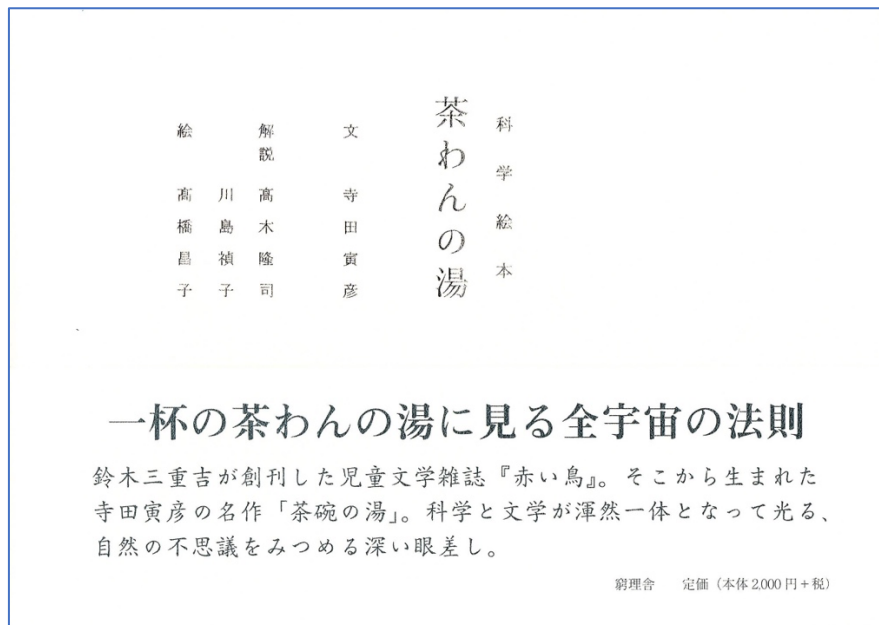


ある防災シンポジウムの準備のため、登壇者と打ち合わせを進めている。相手は気象予報士、建設関係、国交省の関係者などだ。国民への要望として、彼らが口をそろえていうのは、自分たちが情報発信していることを受け止めてほしいということだ。「受け止めてほしい」とわざわざいうということは、現状、受け止められていないということになる。

なぜか。端的に言うと、彼らの発する情報を、国民が欲してないからである。それらの情報を利用する意義を感じていないからである。だから、情報を受け止めてほしいければ、知識を与えようとするのではなく、国民ひとりひとりにとって、それらの情報がなぜ必要なのか、その意義を説明すべきだろう。主体性をもたない相手に、何をいったところで、彼らの心には響かない。

ところで、先日、高知へ出張に行った折に、県立文学館に立ち寄った。寺田寅彦師が、児童文学雑誌に投稿した、「茶わんの湯」という文章を題材にした企画展を開催していたのだ。「茶わんの湯」は、寺田師が、茶碗の中の温かい茶湯の対流や、茶碗から立ち上る湯気の「ゆらぎ」を題材に、地球規模の物理現象を解き明かし、自分たちの生活を取り巻く自然環境がどれだけ変化に富んでいるかということ、読者の子供たちに問いかけた文章だ。



大正7年に著された寺田寅彦師による『茶わんの湯』を収録した絵本

この文章は、科学の知識を与えようとするものではなく、身近な現象を根気よく観察し、筋道を立てて考えることの面白さと、大切さを、子供たちに呼びかけたものだ。

つまり、知識を得ることは、それを身にまとうことが目的なのではなくて、世の中で生きていくうえで、そこで起きる現象に振り回されるのではなく、科学的センスでもって「何が正しくて、何が間違っているのか」という判断力を養う肥やしにすべきだと説いているのだ。自分たちが、どれほど、変化に富んだ環境に生きているかを知れば、時に荒ぶる自然を相手にどう、生き延びるのかを考えることに、寺田師の思考はつながっていったのだろう。

この「茶わんの湯」が書かれたのは大正7年。そして、関東大震災が起きたのは大正12年のことである。

(令和4年10月)